

第 52 回名古屋春栄会
演目のあらまし

平成 28 年 7 月 31 日

名古屋春栄会事務局

目 次

弓八幡（ゆみやわた）	1
経政（つねまさ）	2
熊野（ゆや）	3
網ノ段（あみのだん）〔桜川（さくらがわ）〕	4
絃上（けんじょう）	5
花月（かげつ）	6
野守（のもり）	7
花月（かげつ）	9
清経（きよつね）	10
笠ノ段（かさのだん）〔芦刈（あしかり）〕	11
鼓ノ段（つづみのだん）〔箆太鼓（ろうだいこ）〕	12
橋弁慶（はしべんけい）	13
高砂（たかさご）	15
巻絹（まきぎぬ）	16
放下僧（ほうかそう）	17
〔能のミ二知識	18〕

このリーフレットは、第52回名古屋春栄会の演目を解説したものです。
演目の記載順は、番組の順です。
詞章については、金春流の謡本から転載しました。

弓八幡（ゆみやわた）

【分類】 初番目物（脇能） ＊神舞

【作者】 世阿弥

【主人公】 前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：高良ノ神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

後宇多院に仕える臣下が、如月初卯の男山八幡宮（石清水八幡宮）の如月初卯の神事に陪従として参詣するよう命じられ、八幡宮に向います。やがて八幡宮に着き、参詣しようとする、一人の男を伴い、錦の袋に納めた弓を持った老翁がいます。不思議に思って尋ねると、老翁は「私は長年この八幡宮に仕えているもので、桑の弓を君に捧げようと思い、あなたを待っていたのです」と答えます。そして、桑の弓を袋に納めたまま君に捧げるいわれなどを詳しく語ります。さらに、八幡宮のいわれを語り、実は自分は高良の神で、君を守るためにここに現れたと言い、かき消すように消えてしまいます。

<中入>

臣下が神託を伝えるため、都に帰ろうとすると、どこからか音楽が聞こえ、良い香が薫ってきます。するとそこへ、高良〔かわら〕の神がその姿を現し、舞を舞い、御代を祝い、八幡宮の神徳を讃えます。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

あら有難やもとよりも。人の国よりわが国。他の人よりはわが人と。誓いの末もあきらけき。真如実相の月弓の。八百万代に末までも。動かず絶えず君守る。高良の神とは。わが事なり。二月の。初卯の神楽おもしろや。うたえや謡え。日影さすまで。そでの白木綿かえすがえすも。千代の声ごえ。謡うとかや。

<神舞>

げにや末世と。言いながら。げにや末世と言いながら。神の誓いはいやましに。かくあらたなる御相好。拝むぞたつかりける。君を守りの御誓い。もとより定めある上に。殊にこの君の神徳。天下一統と守るなり。げにげに神代今の代の。しるしの箱の明らかに。この山上に宮居せし。神の昔は。ひさかたの。月の桂の男山。さやけき影は所から。畜類鳥類鳩吹く松の風までも。皆神体と現れ。げにたのもしき神ごころ。示現大菩薩八幡の。神徳ぞ豊かなりける。神徳ぞ豊か。なりける。

経政（つねまさ）

【分 類】二番目物（修羅物） ＊カケリ

【作 者】不詳

【主人公】シテ：平経政の霊（面・童子）

【あらすじ】（仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

京都の仁和寺、御室御所〔おむろごしよ〕の守覚〔しゅがく〕法親王は、琵琶の名手である平経政を少年の頃から寵愛されていました。ところが、このたびの一ノ谷での源平の合戦において、経政が討ち死にしたので、生前、彼にお預けになったこともあった「青山〔せいざん〕」という銘のある琵琶の名器を仏前に供え、管絃講〔かげんこう〕を催して回向するように行慶〔ぎょうけい〕僧都に仰せつけになります。行慶は、管絃を奏する人々を集めて法事を行います。すると、その夜更けになって、経政の亡霊が幻のように現れ、御弔いのありがたさに、ここまで参ったのであると僧都に声をかけます。そして、手向けられた琵琶を懐かしく弾き、夜遊の舞を舞って興じます。しかし、それもつかの間、やがて修羅道の苦しみに襲われ、憤怒の思いに戦う自分の姿を恥じ、灯火を吹き消して闇の中に消え失せます。

【詞章】（仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

あら恥かしや嗔恚の有様。はや人々に見えけるか。あの灯火を消し給えとよ。灯火を背けては。灯火を背けては。ともに憐れむ深夜の月をも。手に取るや帝釈修羅の。戦いは火を散して。嗔恚の矢先は雨となって。身にかかれば払う剣は。他を悩し我と身を切る。紅波はかえって猛火となれば。身を焼く苦患恥かしや。人には見えじものを。あの灯火を消さんとて。その身は愚人。夏の虫の。火を消さんと飛び入りて。嵐とともに灯火を。嵐とともに。灯火を吹き消して。くらまぎれより。魄霊は失せにけり。魄霊の形は失せにけり。

熊野（ゆや）

【分 類】三番目物（現在鬘物） *中ノ舞

【作 者】不詳

【主人公】シテ：熊野（面・小面）

【あらすじ】（今回の仕舞[キリ]の部分…下線部）

平宗盛は遠江国（静岡県）池田の長の熊野を愛妾として都に留めています。その熊野が故郷に残している老母が病気となり、熊野の帰国を促す手紙を侍女の朝顔がたずさえて都に上って来ます。心弱くなっている母の様子に熊野は宗盛のもとに行き、その手紙を見せて暇を乞うことにします。熊野は宗盛の邸に行き、母の手紙を読み上げて、今一度母に会いたいと帰国を願いますが許されません。宗盛はかえって熊野の心を引き立てようと花見の供を命じ、牛車に乗って一緒に清水寺に向かいます。都大路の春景色にひきかえ、車中の熊野はひたすら母を案じており、清水に着いて車を降りると、まず観世音に母の命を折ります。やがて花の下で酒宴が始まり、熊野は宗盛の勧めで、心ならずも興を添えるためにあたりの風物を眺めながら舞いを舞い、花の美しさをたたえます。ところが舞の途中でにわかには村雨が降り出し、花を散らします。熊野は舞をやめ、「いかにせん都の春も惜しけれど、馴れし東の花や散るらん」と歌を詠み、それを短冊にしたためて宗盛に差し出します。その歌を見た宗盛は、熊野の心を哀れに思い、東国に帰ることを許します。熊野は喜び、これも観世音のおかげと感謝し、宗盛の気持ちの変わらぬうちにと、その場から故郷に旅立ちます。

【詞章】（今回の仕舞[キリ]の部分の抜粋）

あらありがたや嬉しやな。これ観音のご利生なり。これまでなりや嬉しやな。これまでなりや嬉しやな。かくて都にお供せば。またもや御意の変わるべきただ。このままにお暇と。いうつけの鳥が鳴く。東路さしてゆく道の。東路さして行く道の。やがて休ろう逢坂の。関の戸ざしも心して。明け行く跡の山見えて。花を見捨つるかりがねの。それは越路われはまた。あずまに帰る名残かな。あずまに帰る名残かな。

網ノ段（あみのだん）〔桜川（さくらがわ）〕

【分 類】四番目物（狂女物） *イロエ

【主人公】前シテ：桜子の母（面・曲見）、後シテ：桜子の母（面・曲見）

【作 者】世阿弥

【あらすじ】（今回の仕舞〔網ノ段〕の部分…下線部）

九州日向国（宮崎県）、桜の馬場の西に、母ひとり子ひとりの貧しい家がありました。その家の子、桜子は、東国方の人商人にわが身を売り、その代金と手紙を母に渡してくれと頼み、国を出ます。人商人が届けた手紙から桜子の身売りを知った母は、悲しみに心を乱し、氏神の木華開耶姫に我が子の無事を祈り、桜子の行方を尋ねる旅に出ます。

<中入>

それから三年がたち、遠く常陸国（茨城県）の桜川はちょうど桜の季節です。桜子は磯辺寺に弟子入りしており、今日は師僧に誘われて、近隣の花の名所の桜川に花見にやって来ます。里人は、桜川の川面に散る花びらをすくって狂う女がいるから、この稚児に見せるとよいとすすめます。呼び出された狂女は、九州からはるばるこの東国まで、我が子を探してやって来たことを語り、失った子の名前も桜子、この川の名も桜川、何か因縁があるのだろうが、どうして春なのに我が子の桜子は咲き出でぬかと嘆きます。さらに桜を信仰する謂れや我が子の名前の由来、桜を詠じた歌などを語り、落花に誘われるように、桜子への思いを募らせて狂乱の極みとなります。僧は、これこそ稚児の母であると悟り、母子を引き合わせます。母は正気に戻って嬉し涙を流し、親子は連れ立って帰国します。

【詞章】（今回の仕舞〔網ノ段〕の部分の抜粋）

あたら桜の。あたら桜の科は散るぞ怨みなる。花もうし風もつらし。散ればぞ誘う。誘えばぞ散る花かずら。かけてのみ眺めしは。名も青柳の糸桜。霞の間には。かば桜。雲と見しは。三吉野の。三吉野の。三吉野の。川淀滝つ波の。花をすくわばもし。国栖魚やかからまし。または桜魚と。聞くも懐しや。いずれも白妙の。花も桜も。雪も波も見ながらに。すくい集め持ちたれども。これは木木の花。まことはわが尋ぬる。桜子ぞ恋しき。わが桜子ぞ。恋しき。

絃上（けんじょう）

【分 類】四・五番目物（貴人物、略脇能） ＊早舞

【作 者】不詳（金剛弥五郎？）

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉または三光尉）、後シテ：村上天皇の霊（面・中将）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

時の太政大臣藤原師長は、天下に隠れもない琵琶の名手です。もはやわが国にはライバルはいないと思い、唐（中国）に渡ってさらにその奥義を窮めようと、従者を伴い、都を出て須磨の浦までやって来ます。そこで、一夜の宿を借りた塩屋の主の望みに応じて、師長が一曲弾じていると、にわかには村雨が降り来り、板庇を打ちます。すると老夫婦が、苫を取り出して板屋を葺いて調子を整えます。師長はその措置に驚き、音曲に嗜みのある者と見て、一曲を所望します。すると翁は琵琶、姥は琴によって越天楽を合奏します。師長はその神技に感じ、国内に自分より優れた弾き手はいないと思いがったことを深く恥じて、立ち去ろうとします。老夫婦はこれを引き止め、自分達は村上天皇と梨壺女御の霊であり、師長の入唐を止めるために現れたのだと述べて姿を消します。

<中入>

やがて村上天皇の霊が神々しい装束で現れ、龍神に命じて、竜宮に持ち去られた獅子丸の琵琶を取り寄せ、これを師長に下賜します。そして自らも、興に乗じて秘曲を奏で、舞を舞って昇天します。師長は、何よりの土産と名器をたずさえて都に戻ります。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

獅子には文殊やめさるらん。獅子には文殊やめさるらん。帝は飛行の車に乗じ。八大竜馬に引かれたまえば。師長も飛馬にむちをあげて。馬上に琵琶をたずさえて。馬上に琵琶をたずさえて。須磨の帰洛ぞ。ありがたき。

花月（かげつ）

【分類】四番目物（芸尽物） ＊鞆鼓

【作者】不詳

【主人公】シテ：花月（面・喝食）

【あらすじ】（今回の連吟の部分…下線部）

子どもが7歳の時、行方不明になったので、父は僧となり、その子を捜して、九州彦山の麓から出て諸国を廻り、ついに都に着き、清水寺に詣でます。そして、来合わせた門前の男に、何か珍しいものはないかと尋ねると、男は花月という喝食の話をして。まもなく、その花月が現れ、すすめられるままに恋の小歌をうたってたわむれます。そこへ鶯が来て、枝を飛び交い花を散らすので、弓矢で狙いますが、仏の殺生戒を破るまいと思いとどまります。そして、今度は、清水寺の縁起を曲舞で舞って見せます。先ほどから花月の様子を見ていた旅僧は、これこそ行方を尋ねる我が子ではないかと思い、さまざまの質問をし、自分は父だと名乗ります。花月は父との再会を喜び、門前の男の所望にまかせて、鞆鼓を打って、天狗にさらわれてからの身の上話を謡います。そして、これからは父と共に仏道修行に出ようと立ち去ってゆきます。

【詞章】（連吟の部分の抜粋）

シテ「われはもと筑紫の者。あたり近き彦山にのぼりしに。七つの年天狗に。
地謡「とられてゆきし山々を。思いやるこそ。悲しけれ。とられてゆきし山々を。
思いやるこそ悲しけれ。まづ筑紫には彦の山。深き思いを四王寺。讃岐には松山。
ふり積む雪のしろ峯。さて伯耆には大山。さて伯耆には大山。丹後丹波の境なる。
鬼が城と聞きしは天狗よりも。おそろしや。さて京近き山々さて京近き山々。愛宕の山の太郎坊。比良のの峯の次郎坊。名高き比叡の大嶽に。すこし心のすみしこそ。月の横川の流れなれ。日頃はよそにのみ。みてや止みなんと眺めしに。かづらきや高天の山。山上大峰釈迦のだけ。富士の高嶺に上がりつつ。雲に起きふす時もあり。か様にくるいめぐりて。心乱るるこのささら。さらさらさらさらとすっては謡い。舞うてはかぞえ。山々峯々。里々を。めぐり廻ればあの僧に。あい奉るうれしさよ。今よりこのささら。さつとすててき候らわば。あれなる御僧に。つれまいらせて佛道。つれ参らせて。佛道の修行に。いづるぞ嬉しかりける。いづるぞうれしかりける。

野守（のもり）

【分類】 五番目物（切能＝鬼神物） ＊舞働

【主人公】 前シテ：野守（面・三光尉）、後シテ：鬼神（面・小癡見）

【作者】 世阿弥

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

出羽国（山形県）の羽黒山からやって来た山伏が、大峰葛城山へと参る途中、大和国（奈良県）春日の里に着きます。そして、誰かに、このあたりの名所について聞きたいものだと思っていると、ちょうど一人の老人がやって来ます。そこで、近くにあっていわれのありそうな池について尋ねます。すると老人は、私のような野守が姿を映すので、この池は「野守の鏡」と呼ばれているが、本当の「野守の鏡」というのは、昼は人となり、夜は鬼となってこの野を守っていた鬼神の持っていた鏡のことだと答えます。さらに、「はし鷹の 野守の鏡 得てしかな 思い思わずよそながら見ん」という和歌は、この池について詠まれたのかと山伏が聞くと、老人は、昔この野で御狩のあった時、御鷹を逃がしたが、この水に姿が映ったので行方がわかったから、その歌が詠まれたのだと語ります。山伏がまことの野守の鏡を見たいものだというと、鬼神の持つ鏡を見れば、恐ろしく思うであろうから、この水鏡を見なさいと言い、老人は塚の中へ姿を消します。

<中入>

山伏は、ちょうど来合わせた土地の人から、野守の鏡の名の由来などを再び聞かされ、先の老人は、野守の鬼の化身であろうと告げられます。そこで、この奇特を喜んで塚の前で祈っていると、鬼神が鏡を持って現れ、天地四方八方を映して見せた後、大地を踏み破って奈落の底へと消えていきます。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

ありがたや。天地をうごかし鬼神を感ぜしめ。土砂山河草木も。一仏成道の法味に引かれて。鬼神に横道くもりもなき。野守の鏡は。現われたり。恐ろしや打ち火かかやく鏡の面に。映る鬼神の眼の光。面を向くべきようぞなき。恐れたまわば帰らんと。鬼神は塚に。入らんとすれば。しばらく鬼神待ちたまえ。夜はまだ深き後夜の鐘。時も虎伏す野守の鏡。法味にうつりたまえとて。重ねて数珠を。おしもんで。大嶺の雲を凌ぎ。大嶺の雲を凌ぎ年行の。功をつむこと一千余か日。しばしば身命を。惜しまず採花。汲水にひまを得ず。一矜伽羅二制多伽。三に俱利伽羅七大八大。金剛童子。東方。

<舞働>

東方。降三世明王もこの鏡にうつり。また南西北方を映せば。八面玲瓏と明きらかに。天を映せば。非想非非想天までくまなく。さてまた大地をかがみ見れば。まず地獄道。まずは地獄の有様をあらわす。一面八丈の浄玻璃の鏡となって。罪の軽重罪人の呵責。打つや鉄杖のかずかずことごとく見えたり。さてこそ鬼神に横道を正

す。明鏡の宝なれ。すわや地獄に帰るぞとて。大地をかつぱと踏み鳴らし。大地を
かつぱと。踏み破って。奈落の底にぞ。入りにける。

花月（かげつ）

【分類】 四番目物（芸尽物） *羯鼓

【作者】 不詳

【主人公】 シテ：花月（面・喝食）

【あらすじ】（仕舞〔クセ〕部分…下線部）

子どもが7歳の時、行方不明になったので、父は僧となり、その子を捜して、九州彦山の麓から出て諸国を廻り、ついに都に着き、清水寺に詣でます。そして、来合わせた門前の男に、何か珍しいものはないかと尋ねると、男は花月という喝食の話をして。まもなく、その花月が現れ、すすめられるままに恋の小歌をうたってたわむれます。そこへ鶯が来て、枝を飛び交い花を散らすので、弓矢で狙いますが、仏の殺生戒を破るまいと思いとどまります。そして、今度は、清水寺の縁起を曲舞で舞って見せます。先ほどから花月の様子を見ていた旅僧は、これこそ行方を尋ねる我が子ではないかと思ひ、さまざまの質問をし、自分は父だと名乗ります。花月は父との再会を喜び、門前の男の所望にまかせて、羯鼓を打って、天狗にさらわれてからの身の上話を謡います。そして、これからは父と共に仏道修行に出ようと立ち去ってゆきます。

【詞章】（仕舞〔クセ〕の部分の抜粋）

そもそもこの寺は。坂の上の田村丸。大同二年の春の頃。草創ありしこのかた。
いまも音羽山。峯の下枝のしただりに。濁るともなき清水の。流れを誰か汲まざらん。
ある時この瀧の水。五色に見えて落ちければ。それをあやしめ山に入り。その水上を
尋ねるに。こんじゆせんの岩の洞の。みずの流れに埋もれて。名は青柳の朽木あり。
その木より光さし。異香四方に薫ずれば。さてはうたかう所なく。楊柳観音の。御所
変にてましますかと。皆人手をあわせ。なおもその奇特を。知らせてたべと申せば。
くち木の柳は緑をなし。櫻にあらぬ老木まで。皆白妙に花さきけり。さてこそ千手の
誓いには。枯れたる木にも花さくと今の世までも。申すなり。

清経（きよつね）

【分類】二番目物（修羅能）

【作者】世阿弥

【主人公】シテ：平清経

【あらすじ】（仕舞〔クセ〕部分…下線部）

平清経の家臣、淡津三郎はひそかに一人で九州から都へ戻って来ます。清経は、平家一門と共に幼帝を奉じて都落ちし、西国へと逃れますが、敗戦につぐ敗戦に、前途を絶望して、豊前国（福岡県）柳ヶ浦で、船から身を投げて果ててしまいます。三郎は、その形見の黒髪を、清経の妻に届けるために、戻って来たのです。その話を聞いた妻は、せめて討ち死にするか病死ならともかく、自分を残して自殺するとは、あんまりだと嘆き悲しみます。そして形見の黒髪を見るに忍びず、涙ながらに床につくと、夢の中に清経の霊が現れ、妻に呼びかけます。妻は嬉しくもあるが、再び生きて姿を見せてくれなかったことを恨みます。清経は、都を落ちた平家一門が、筑紫での戦にも敗れ、願をかけた宇佐八幡の神からも見放されたいきさつ、敗戦の恐ろしさ、不安、心細さを話して聞かせ、望みを失って月の美しい夜ふけ、西海の船上で横笛を吹き、今様を謡って入水したことを物語って、妻を納得させようとします。続いて修羅道の苦しみを見せますが、実は入水に際して十念を唱えた功德で成仏し得たと述べ、消えてゆきます。

【詞章】（仕舞〔クセ〕の部分の抜粋）

かかりける所に。長門の国へも。敵向うと聞きしかば。また舟にとり乗りて。いづくともなくおし出だす。心の内ぞ哀れなる。げにや世の中の。移る夢こそまことなれ。保元の春の花。寿永の秋の紅葉とて。散りぢりになり浮む。一葉の舟なれや。柳が浦の秋風の。追手顔なるあとの波。白鷺のむれいる松見れば。源氏の旗をなびかす。多勢かときもをけす。ここに清経は。心をこめて思うよう。さるにても八幡の。ご託宣あらたに。心根に残ることあり。まこと正直の。こうべに宿りたもうかと。ただ一筋に思い切り。あじきなや。とても消ゆべき露の身を。なおおき顔に浮きくさの。波にさそわれ舟にただよいていつまでか。憂き目を水鳥の。沈みはてんと思ひ切り。人にはいわで岩代の。まつことありや暁の。月にうそむく気色にて。舟の舳板に立ちあがり。腰よりようじょう抜き出だし。音もすみやかに吹きならし。いまようをうたい朗詠し。来し方行く末をかがみて。ついにはいつかあだ波の。返らぬはいにしえ。とまらぬ心づくしよ。この世とても旅ぞかし。あら思い残さずやと。よそ目にはひたふる。狂乱と人は見るらん。よし人はなにとも。みるめをかりの夜の空。西にかたむく月を見れば。いざやわれも連れんと。南無阿弥陀仏弥陀仏。むかえさせたまえと。ただ一声を最後にて。舟よりかっぱと落ち汐の。底のみくずと沈み行く。憂き身のはてぞ悲しき。

笠ノ段（かさのだん）〔芦刈（あしかり）〕

【分類】 四番目物（男物狂物） *男舞

【作者】 世阿弥（古能を改作）

【主人公】 シテ：日下左衛門（直面）

【あらすじ】（今回の仕舞〔笠ノ段〕の部分…下線部）

津の国の日下の里（大阪府東大阪市）の住人の左衛門は貧乏のすえ、心ならずも妻を離縁します。妻は、京の都に上って、さる高貴な人の若君の乳母となり、生活も安定したので、従者を伴って難波の浦へ下り、夫の行方を尋ねます。在所の者に聞いても、以前のところにはいないということで、途方にくれますが、しばらくの間、付近に逗留して夫を捜すことにします。一方、左衛門は落ちぶれて、芦を刈りそれを売り歩く男になっています。しかし、彼はその身の不遇を嘆くでも怨むでもなく、すべてを運命と割り切って、時に興じ物に戯れ、自分の生業に満足しています。そして、ある日妻の一行とも知らず、面白く囃しながら芦を売り、問われるままに、昔、仁徳天皇の皇居があった御津の浜の由来を語り、笠尽しの舞をまって見せます。いよいよ買ってもらった芦を渡す段になって、思いがけず妻の姿を見つけ、さすがに今の身の上を恥じて、近くの小屋に身を隠します。後を追おうとする従者をとどめ、妻は自分で夫に近づき、やさしく呼びかけます。夫婦は和歌を詠み交わして、心もうちとけ、再びめでたく結ばれます。装束も改めた左衛門は従者のすすめで、さわやかに祝儀の舞をまい、夫婦うち揃って京の都へ帰ってゆきます。

【詞章】（今回の仕舞〔笠ノ段〕の部分の抜粋）

あれ御覽ぜよ御津の浜に。網子ととのうる網船の。えいやえいやと寄せ来たるぞや。名にし負う難波津の。名にし負う難波津の。歌にも大宮の。内まで聞こゆ網引きすと。網子ととのうる。海士の呼び声と詠みおける。古歌をも引く網の。目の前に見えたる有様。あれ御覽ぜよや人人。おもしろや心あらん。おもしろや心あらん。人に見せばや津の国の。難波わたりの春の景色。おぼろ舟こがれ来る。沖のかもめ磯千鳥。連れだちて友呼ぶや。海士の小舟なるらん。雨に着る。田蓑の島もあるなれば。露も真管の。笠はなどか無からん。難波津の春なれや。名に負う梅の花笠。縫うちょう鳥の翼には。鶺鴒も有明の。月の笠に袖さすは。天つ乙女の衣笠。それは乙女。これはまた。なにわ女の。難波女の。かずく袖笠肘笠の。雨の芦辺の。みだるるかたおなみ。あなたへざらり。こなたへざらり。ざらりざらり。ざらざらざと。風の上げたる。古簾。つれづれもなき心。おもしろや。

鼓ノ段（つづみのだん）〔箆太鼓（ろうだいこ）〕 ——

【分 類】四番目物（狂女物） ＊カケリ

【作 者】不詳

【主人公】シテ：関清次の妻（面・曲見）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

九州松浦の何某は家人の関清次という者が、他郷の者と口論の末、相手を殺害したので、捨てておけず、捕らえて牢に閉じ込め、下人に番を命じます。ところが、ある夜、清次は牢を破って逃げてしまいます。領主は清次の妻を呼び出し、夫の居所を尋ねます。女は知らないと言い張るので、判明するまで身代わりに入牢させます。領主は再び逃さないため、牢に太鼓を掛け、一刻ずつそれを打って番をするように下人に申し渡します。ところが女がにわかに狂気を起こしたようなので、牢から出してやろうとすると、この牢こそ愛する夫の形見だから出ないと言います。そのやさしい心を感じた領主は、夫婦ともに許すことにします。牢から出て来た女はそこに掛けてある太鼓を見つけ、古歌を引いて夫の身を案じ、中国の鼓の故事を歌いながらその鼓を打ちます。すると却って狂乱の態が増し、夫を慕うあまり、なつかしいこの牢を離れないと、再び牢の中に入ってしまう。領主は、あまりの痛々しさに深く心を打たれ、亡父十三年の追善にと夫婦の赦免を強く約し、神明に誓います。すると女は冷静になり、初めて夫の居所を明かし、自ら夫の許を訪ねて連れ戻して、仲睦まじく暮らします。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

鼓の声も時過ぎて。鼓の声も時過ぎて、日も西山にかたむけば。夜の空も近づく。六つの鼓打とうよ。五つの鼓はいつわりの。ちぎりあだなるつまごとの。ひき離れいづくにか。わがごとく忍び寝の。やわらやわら打とうよや。やわらやわら打とうよ。四つの鼓は世の中に。四つの鼓は世の中に。恋ということも。うらみということも。なき習いならば。ひとり物は思わじ。九つの。九つの。夜半にもなりたや。あら恋しわがつまの。面影に立ちたり。嬉しやせめてげに。身代わりに立ちてこそは。二世のかいもあるべけれ。この箆出ずることあらじ。懐かしのこの箆や。あら懐かしのこの箆。

橋弁慶（はしべんけい）

- 【分類】 二、四、五番目物（雑能＝現在物） ＊イロエ
【作者】 不詳
【主人公】 前シテ：武蔵坊弁慶（直面〔ひためん＝素顔〕）、
後シテ：武蔵坊弁慶（面・長霊癒見）、子方：牛若丸

【あらすじ】（今回の独吟の部分…下線部）

比叡山西塔の近くに住む武蔵坊弁慶は、ある願い事があって、北野の天神へ丑の刻詣をしています。ちょうど今夜が満願なので出かけようとする、従者は昨夜、五条の橋に十二、三歳の少年が出て、通行人を小太刀で斬って廻ったとのことだからと、今夜の参詣をやめるようにいいます。弁慶が、大勢で捕まえればいいのと言っていると、従者は、目にもとまらぬ早業で、広い都にもあれ程の者はいない、多分、人間ではなく化生の者だとの事と答えるので、弁慶も一度は思いとどまります。しかし、弁慶ほどの者が聞き逃げは無念と、かえって討ち取る決心を固めて、五条の橋へ向かいます。

<中入>

牛若は、母の命により、明日からは鞍馬山へ上ることとなっているので、今夜を名残り五条橋へ行き、通る人を待っています。そこへ大鎧に身をかため、大長刀を肩にした弁慶がやって来ます。弁慶は、女装をしている牛若に気を緩めて、通り過ぎようとする、牛若は大長刀の柄を蹴り上げます。怒った弁慶が斬りかかりますが、散々に牛若にもてあそばれます。弁慶は、牛若と聞いて降参し、主従の契りを結んで、九条の邸へお供します。

【詞章】（今回の独吟の部分の抜粋）

すわしれ者よ。もの見せんと。長刀やがて。取り直し。長刀やがて取り直し。いでもの見せん手なみのほどと。切ってかかれば牛若は。少しも騒がずつつ立ちなおって。薄衣引きのけつつ。しづしづと太刀抜きはなち。つつ支えたる長刀の。きっさきに太刀打ちあわせ。つめつ開いつ戦いしが。なにとかしたりけん。手もとに牛若寄るとぞ見えしが。たたみ重ねて打つ太刀に。さしもの弁慶合わせかねて。橋桁を二三間。しきって肝をぞ消したりける。ものものしあれほどの。小姓一人をさればとて。手もとにいかで洩らすべきと。長刀柄長くおっ取りのべて。走りかかってちようど打てば。そむけて右に飛びちごう。取りなおして裾を薙ぎ払えば。躍りあがって足もためず。宙を払えば頭を地につけ。ちぢに戦う大長刀。打ち落とされて力なく。組まんとすれば切り払う。すがらんとするも便りなし。せん方なくて弁慶は。希代なる少人かなとて。あきれはててぞ立ったりける。ふしぎやおん身誰なれば。まだいとけなきおん身にて。かほどけなげにましますぞ委しく名乗り。おわしませ。今はなにをか包むべき。われは牛若源の。義朝のおん子か。さて汝は。西塔の武蔵弁慶なりと。互に名乗りあい。互に名乗りあいて。降参申さんご免あれ。少人のお

ん事。われは出家。位も氏もけなげさも。よき主なれば頼むべしや。粗忽にやおぼし召すらんさりながら。これまた三世の奇縁の始め。今よりのちは主従ぞと。契約堅くつかまつり。薄衣かずかせ奉り。弁慶は長刀うちかずいて。九条の御所へぞ参りける。

高砂（たかさご）

【分類】初番目物（脇能＝男神物） *神舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：尉（面・小尉）、後シテ：住吉明神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

肥後国（熊本県）、阿蘇の宮の神主・友成は、都見物を思い立ち旅に出ます。途中、播州（兵庫県）高砂に立ち寄り、浦の景色を眺めていると、そこへ竹杷（熊手）と杉箒を持った老夫婦がやって来て、松の木陰を掃き清めます。友成は、有名な高砂の松はどれかと尋ね、また、高砂の松と住吉の松とは場所が離れているのに、なぜ相生の松と呼ばれるのかと、その理由を尋ねます。老人は、この松こそ高砂の松であると語り、たとえ場所を隔てていても夫婦の仲は心が通うものだ、現にこの姥は当所の者、尉は住吉の者だと言います。そして老夫婦は、さまざまな故事を引いて松のめでたさを語り、御代を寿ぎます。やがて二人は、実は相生の松の精であることを明かし、住吉でお待ちしていると告げて、小舟に乗って沖の方へ消えていきます。

<中入>

友成は、土地の者に再び相生の松のことについて聞き、先程の老夫婦の話をする、それは奇事なことだから、早速自分の新造の舟に乗って住吉へ行くことを勧められます。そこで、友成たちも高砂の浦から舟で住吉へ急ぎます。住吉へ着くと、残雪が月光に映える頃、住吉明神が出現し、千秋万歳を祝って颯爽と舞います。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

高砂やこの浦舟に帆をあげて。この浦舟に帆をあげて。月もろともにいでしおの。浪の淡路の嶋かげや。遠く鳴尾の沖すぎて。早や住の江につきにけり。早や住の江につきにけり。われ見ても久しくなりぬ住吉の。岸の姫松いく世経ぬらん。むつましと君は知らずや瑞がきの。久しき世々の神かぐら。夜のつづみの拍子を揃えて。すゞしめ給え。宮づこたち。西の海。あおきがはらの波間より。あらわれいでし。住の江の。春なれや。残の雪のあさかがた。玉藻かるなる岸陰の。松根によって腰をすれば。千年の緑。手にみてり。梅花を折って。首にさせば。二月の雪。ころもに落つ。

<神舞>

有難の影向や。有難の影向や。月すみよしの神あそびみかげを拝むあらたきよ。げにさまさまの舞姫の。声もすむなり住の江の。松陰もうつるなる。青海波とはこれやらん。神と君との道すぐに。都の春にゆくべくは。それぞ還城楽の舞。さて万歳の。小忌衣。指すかいなには。悪魔を払い。おさむる手には。壽福をいだき。千秋楽は民をなで。万歳楽には命をのぶ。相生の松風。さっさっの声を楽しむ。さっさっの声を楽しむ。

巻絹（まきぎぬ）

【分類】 四番目物（神楽物） *神楽

【作者】 不詳

【主人公】 シテ：巫女（面・増髪または曲見）

【あらすじ】（仕舞部分…下線部）

時の帝が不思議な夢をご覧になり、千疋の巻絹を諸国から集めて、熊野三社に奉納するようにとの宣旨が下ります。そして勅使が熊野にあって、国々から巻絹が集まってくるのを取りまとめています。ところが、都からの分だけが未だ到着しません。今や遅しと待っている勅使は、従者に、都の者が来ればすぐに連絡するように命じます。都からの使者は初めての紀伊国（和歌山県）下りであり、また大切な勅命でもあるので、緊張して旅を急いだのですが、熊野に着いて、まず音無天神に参詣し、折からの冬梅の見事さに一首の歌を詠み、神に手向け、その後、勅使の前に出ます。勅使は、使者の遅参の罪を責めて縛らせます。すると一人の女が現れ、その者は昨日音無天神に詣で、和歌を手向けた者であり、神も受納されたのだから、戒めの縄を解くようにといいます。彼女は音無天神の神霊が憑り移った巫女ですが、勅使は賤しい身で歌など詠めるはずがないがと、神慮を疑います。そこで、巫女はその者に上の句を詠ませ、自分が下の句を続けてできた「音無に かつ咲きそむる 梅の花 句はざりせば 誰か知るべき」という一首を証拠に縄を解かせます。そして和歌の徳、経の威力を説きます。ついで勅使の求めに応じて祝詞をあげ、神楽を舞ううち神がかりの態になり、熊野権現の神徳を語りますが、やがて神は去り、巫女は狂いから覚めます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

証誠殿は。あみだ如来。十悪を導き。五逆をあわれむ。中の御前は。薬師如来。薬となって。二世をたすく。一万文殊。三世の覚母たり。十万普賢。満山護法。かずかずの神神。かの巫に。つくもがみの。御幣も乱れて。空に飛ぶ鳥の。かけり翔りて地にまた躍り。数珠をもみ袖を振り。拳足下足の舞の手をつくし。これまでなりや。神はあがらせ給うと言いつつる。声のうちより狂い覚めて。また本性にぞ。なりにける。

放下僧（ほうかそう）

【分類】 四番目物（現在物） *羯鼓〔かっこ〕

【作者】 不詳

【主人公】 前シテ：禅僧・小次郎の兄（直面）、後シテ：小次郎の兄（直面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

下野国(栃木県)の住人、牧野左衛門は、相模国(神奈川県)の利根信俊と口論の末、打ち果たされてしまいます。その子の牧野小次郎は、父の無念を思い、信俊を敵とつけ狙いますが、相手は大勢、こちらは唯一人で思うにまかせません。そこで、幼少から出家している兄に力を求めるべく、禅学修行中の学寮へ訪ねて行きます。そして一緒に仇討に出立しようと促しますが、兄は出家の身を思い、ためらいます。小次郎は、親の敵を打たぬのは不孝であるといい、母を殺した虎をねらって、百日、野に出、虎と見誤って大石を射たが、一心が通じて矢は突き立ち、血が流れた、という中国の故事を物語ります。兄も弟の熱意に動かされ、仇討に同意します。そして二人は談合の末、敵に近寄る方便として、当時流行の放下僧と放下に変装して、故郷に名残りを惜しみつつ出発します。

<中入>

一方、利根信俊は夢見が悪いため、瀬戸の三島神社への参詣を志します。道中、放下が来るといので、従者が旅の徒然にと呼び寄せます。小次郎兄弟は、浮雲・流水と名乗り、信俊に近づきます。そして、兄は自分の持つ団扇のいわれを、弟も携えた弓矢のことを面白く説きます。つづいて禅問答に興じ、曲舞や羯鼓、小歌などさまざまな芸を見せていきます。そして、相手の油断を見すまし、兄弟ともども斬りかかって、首尾よく本望をとげます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

面白の。花の都や筆に書くとも及ばじ。東には。祇園清水落ちくる滝の。音羽の嵐に地主の桜はちりぢり。西は法輪。嵯峨の御寺廻らば廻れ。水車の輪のいせき井堰の川波。川柳は。水に揉まるるふくら雀は。竹に揉まるる野辺のすすきは。風に揉まるる都の牛は。車に揉まるる茶臼は挽木に揉まるる。げにまこと。忘れたりとよこきりこは放下に揉まるるこきりこの二つの竹の。代々を重ねて。うち治めたる御代かな。

能のミニ知識

★能の分類

五番立て…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといえます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

○三番目物(鬘[かつら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

★能の楽器

囃子方[はやしかた]…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

笛(能管):竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

小鼓:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

大鼓:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓: 台に据えて、二本のバチで打ちます。

★略式の演能

素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるもの。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡う。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態。

独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するもの。演者は紋付袴姿。

連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するもの。演者は紋付袴姿。

仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞う(通常5分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞う。仕舞扇を用いるが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いない。シテ一人で演じるのが普通だが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキ一人、ツレと子方で演じるものもある。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされる。

舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うもの。平均して10~20分程度の長さになる。長刀や杖などの手道具は用いるが、作り物(大道具)は省略する。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となったが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされている。

袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるもの。

半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるもの。

独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもの。

一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するもの。

一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合がある。

素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるもの。

番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるもの。

★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも早く、颯爽と舞う舞です。

○男舞: 直面の現身の男(武士が多い)が舞う舞です。喜びや祝いの気持ちを表現して、速いテンポで勇壮闊達に舞います。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。

中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。

「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。

精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。

「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。

働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>